



パンチラ鬪争

戦争主義

春日信彦

日教組潰しの鬼教頭

今年4月、糸島中学に篠田教頭が赴任してきた。福岡県下では知らない職員はいないというほど有名な39歳の鬼教頭だ。今年で教頭職4年目になるが、前任の天神中学においての教育改革は日教組を震え上がらせた。

篠田教頭の「戦争主義」を掲げた受験教育は多くの教師から非難されているが、父母からは大歓迎されている。新任教頭にもかかわらず、例年、トップ高校合格者が2名程度の天神中学で、赴任一年目にして一気に合格者10名にまで伸ばした。この実績は教育委員会の度肝を抜いた。篠田教頭は徹底した受験指導を行い、優秀な学生をより優秀にするという「エリート主義」をモットーとしていた。7月に三年生対象に実力テストを行い、9月から成績上位30名を新設した「エリートクラス」に移行させた。

篠田教頭の教育改革には3つの柱があった。1つ目は、目安箱の設置。2つ目は、「エリートクラス」の設置。3つ目は、アイドルグループ活動の禁止。これらの方針は日教組だけでなく教育委員会の非難を浴びることになったが、父母たちからは絶大なる支持を得て、篠田教頭は女帝として君臨することになった。篠田教頭の評判はもはや全国にとどろいていた。

学力テストの成績は校長及び教頭の最大の評価とされるため、教頭は是が非でも成績を向上させたかった。そのためには、「成績主義」に賛同する先生を集める作戦を実行していた。天神中学においても、色気と巧みな話術で教頭好みの人事を教育委員会に働きかけた。その人事の効あって、二年目はさらに合格実績を向上させた。篠田教頭はエリート教育を全国に広めるために、成績が低迷している自由主義の糸島中学への赴任を自ら希望した。

本年度4月の第一回職員会議で、篠田教頭の挨拶は先生たちを震えさせた。自由と平和の教育を推進してきた日教組の先生たちにとっては、まったく理解できない狂気沙汰の教育方針であった。篠田教頭は声高らかに挨拶した。「学生にとって一番大切なことは成績向上であり、自由気ままな行動は学力を低下させる。父母が学校に求めるものは、自由気ままな学校生活ではなく、成績向上のための規律のある厳しい管理の下の受験生活です。そのためには、のほほんとした先生方の考え方及び生活態度を改善していただかなければなりません。

早速、5月から目安箱を設置し、生徒は先生方をどのように見ているか把握したいと考えています。投書の内容によって、先生方が糸島中学にふさわしいか否かを判断してまいりたいと考えています。糸島中学の成績進展のために、今までの自由放任の教育体制を一掃し、完全なる管理体制のエリート教育を実践してまいりたいと思います。是非、エリート教育をご理解いただき、賛同協力をお願いいたします」篠田教頭は天神中学での成功実績を踏まえて自信に溢れた挨拶をした。

特に、英語の石原先生と社会の東国原先生は教頭から敵対視されていた。石原先生に関しては学力テストにおいて英語の成績が県下において中以下であること、東国原先生においては教頭に反抗的であることだ。来年、二人は糸島中学から追放されることを覚悟していた。数学の小沢先生、理科の野田先生も教頭の教育方針にたびたび意見したため、教頭には嫌われている。「成績主義」に賛同しない先生は追放される運命にあった。

明日、7月20日（土）、糸島中学の臨時教職員会議が開催される。明日の臨時会議は目安箱に投書された内容の発表がある。英語の石原先生と社会の東国原先生は、いつものように、石原先生のマンションでお酒を飲みながら篠田教頭の悪口を言い合っていた。石原先生のいつものぼやきが始まった。「おそらく、定年間近の僕は追放宣告を受けるよな。やる気が無いとか、気合が入っていないとか、受験指導には向いてないとか、噛みつかれるのは眼に見えているよ。まあ、どうでもいいけどね。この年になって教頭とやり合う気はないよ。うわべを繕って追放されるよ」

後輩の東国原先生は酔いが回ってきたのか顔を赤くして、しどろもどろに石原先生を慰めた。「先輩、今日は弱気じゃないですか、どうしたんですか？二人して鬼教頭をやっつけようじゃないですか。僕も、明日は覚悟していますよ。徹底して、教頭に反抗してやりますよ。僕は管理職になりたいとも思わないし、おべんちゃらを言って、鬼教頭に取り入る気も毛頭ありませんから」話し終わると杯をグイッとあげた。

石原先生は明日の会議のことを考えると憂鬱になってきた。「僕はあきらめたよ。あと2年で定年だ。立つ鳥あとを濁さず、というじゃないか。君はまだ若い、将来がある、反抗はよくない。鬼教頭のいいところを見習って管理職になったほうが君のためだ。そう、むきにならないほうがいい。長い物には巻かれろ、って言うじゃないか」すぐにかつとなる東国原先生を落ち着かせた。

「先輩、おかしいですよ、いつもの気概はどこにいったんですか。二人で戦うと団結を誓ったじゃないですか。僕は追放されるまで戦いますよ。成績主義こそ不平等をもたらし、さらに軍国主義へと国家を導くのです」東国原先生が石原先生の杯に徳利を傾けると、石原先生は瞼を閉じて舟をこぎ始めていた。ムカついた東国原先生は石原先生の左肩を強くゆすった。はっとして、眼を開けた石原先生は、寝ぼけ顔で話を続けた。

「東国原君、勇み足はよくない。君の将来のことを思って言うが、学生の自由を認め、学生と教師が対等になることは平等理念からはいいかもしれんが、彼らが社会に出たときはきっと苦勞することになる。やはり、教頭の言うように階級主義で学生を管理してやったほうがいいのかももしれない。社会に出れば上下関係が歴然としている。エリートが社会をリードする。一流大学卒業の者が出世して、権力を握る。これは現実だ。もう、僕は理想を追うことに疲れたよ」

思いもかけない弱気な石原先生の発言にマルクスを信奉する東国原先生は落胆した。闘う気力を失った先輩の淋しい姿をじっと見つめていた東国原先生であったが、専制的な鬼教頭の方針に服従する気にはなれなかった。だが、明日の会議で目安箱の内容が明らかになる。二人の評判が公表されることになる。そのことを考えると、次第に落ち込んでいった。もはや、二人はまな板の鯉であった。

教職員会議

教職員室には全職員が席についていた。定刻の2時に教頭の話が始まった。「早速、会議を始めたいと思います。今日の議題は二つです。第一は、目安箱に投書された内容について。第二は、系中アイドルグループITC48の活動禁止についてです。まず、第一の目安箱ですが、箱の中には118通の投書がなされていました。中には落書きのような意味の無いものもありましたが、非常に授業とかかわりのある投書も数多くありました。それでは、順追って発表していきたいと思います。

まず、数学の小沢先生への投書を読み上げます。6通ありました。*声が小さくて何を言っているかよく分からない。*邪馬台国の話はどうぞい。*顔を整形してくれんかや。*試験がムズイ、もっと簡単にしてくれ。*宿題を減らしてくれ。*もっと分かるように説明してほしい。この中で特に問題になるのは*邪馬台国の話はどうぞい。これはどういうことですか？」教頭は小沢先生を睨みつけた。

小沢先生はまさか邪馬台国の話が問題になるとは肝を冷やした。彼は古墳に詳しく、邪馬台国の謎に興味があった。邪馬台国についての書物を若いころから読み、九州説を信じていた。そのこともあって、ついつい授業中に邪馬台国の謎についての話をしていたのだ。数学嫌いの生徒は時間がつぶれるということで喜んでいたが、授業に熱心な生徒にはうざかったということだ。

「まったく、申し訳ありません。授業が退屈にならないようにと邪馬台国の話を時々しました。短い授業時間を考えれば、数学に関係ない話はやるべきではありませんでした。今後、無駄話はしないようにいたします」小沢先生は素直に謝った。だが、鬼教頭の小沢先生への攻撃が始まった。「*顔を整形してくれんかや。ですが、少しはできそうですか？」教頭は平然とした顔で言った。

「整形をしろと！数学に顔は関係ないでしょう。生徒の要望でもそこまで応じることは無いでしょう。イケメンにこしたことは無いでしょうが、不細工な顔でも教育への情熱は人一倍あると思っています。この顔で教えたいと思います」さすが、温厚な小沢先生も顔を整形しろと言われたことにむかついたが、そこはぐっと怒りを抑えて落ち着いた声で返事した。

「確かに、顔と数学は関係無いでしょう。しかし、不細工な顔よりイケメンの方が、生徒の学習意欲が上がるのならば、よりよい方向に改善すべきではないでしょうか。プチ整形ぐらいはできるのではないですか？」鬼教頭のイジメは続いた。来年、小沢先生を追放してイケメンで優秀な稲垣先生を呼ぶ魂胆であった。あまりの侮辱に小沢先生は耐えられなくなった。

「お言葉ではありますが、整形までして生徒の機嫌をとる気はまったくありません。教師の資格条件にイケメンは無いはずです」小沢先生は顔を真っ赤にして大きな声をだした。教頭はじっと小沢先生を睨みつけた。「資格条件には無いでしょう。しかし、この不景気の時代、多くの女性たちは就職難で涙を流しています。必死にもがいている女性の中には、整形をして面接に望む女性たちもいます。そこまで努力をする姿をどう思われますか？」これは明らかなイジメと感じ取った小沢先生は、これ以上の抵抗は不利だと思い小さな声で「努力します」と返事した。

「次は、英語の石原先生です。8通ありました。*発音が悪い。*加齢臭がくさい。*適当な訳をしないでほしい。*太りすぎ。*身なりをきれいにしてほしい。*受験対策をやってほしい。*単語テストをやってほしい。*プリントの答えあわせをやってほしい。特に、*受験対策をやってほしい。ですが、なぜ、やらないのですか？」教頭は目を吊り上げて質問した。

「通常の授業を通して受験対策をやっているつもりです。生徒の中には物足りなく思っている生徒もいるかもしれませんがね。授業では学習塾のような受験対策は必要ないと思っています。ほとんどの生徒は学習塾に通っていますので」石原先生は、受験対策は学習塾がやるべきだと考えていた。じっと聞いていた教頭は、さらに目を吊り上げて、石原先生を睨みつけると攻撃を開始した。

「4月の職員会議で成績主義を徹底するように要望しました。9月にはエリートクラスを設置し、トップ高校の合格実績を伸ばすための受験指導を強化する方針を述べました。これらの投書からすると受験指導の姿勢がまったく見えませんが、石原先生は私のエリート教育に反対なのですか？」教頭はまったくやる気の無い態度にムカついていた。すでに、教頭の心の中では追放を決定していたが、この会議で徹底したイジメに入った。

「先ほど申しあげましたように、通常の授業で受験対策をやっております。教頭のエリート教育には大賛成です。トップ高校に一人でも多く合格できるように今後、さらなる努力をいたします」石原先生はいじめられることを覚悟していたため、一切反抗しなかった。教頭は攻撃を続けた。「*発音が悪い。ですが、まともな発音ができないのであれば、英語の教師としては失格ですね。リスニングに悪影響といえますね」弁解できない弱点を突いて、心の中でニンマリした。

「確かに発音はいいほうではないと思いますが、受験対策には問題ないと思います。リスニング対策としてCDを聞かせています。私以外にも発音がへたな先生はたくさんいると思いますが」発音だけはどうしようもなかった。石原先生は開き直って返答した。「*加齢臭がくさい。ですが、悪臭は学習意欲を低下させます。朝、入浴して、香水をつけられてはどうですか？」教頭は攻撃の手を緩めなかった。

「確かに、加齢臭がくさいと生徒に言われます。教頭のおっしゃるとおりいたします」来年、追放されるのは眼に見えていたので、素直に従うことにした。もはや、石原先生は鬼教頭の下で教鞭を取る気はなかった。次の赴任中学で、ゆったりとした気分で定年退職を迎えたかった。

教頭は英語の石原、数学の小沢、社会の東国原の三人の先生を追放する計画を立てていた。この目安箱の設置は、名目上、生徒の先生に対する気持ちを把握するためのものということだが、本当の目的は、教頭が気に入らない教師を追放するために利用するためのものであった。目安箱の投書はすべて生徒が書いたのではなく、中には教頭が書いたものもあった。つまり、この投書は捏造されていた。教頭は追放予定3人目のイジメに入った。

「次はと・・・社会の東国原先生です。11通あります。*もっと分かりやすい資料を作ってほしい。*プリントの字が小さすぎて読みにくい。*ポイントを絞って板書してほしい。*受験に出るところを教えてほしい。*どこを覚えていいか分からない。*問題集の解説をしてほしい。*早口で何を言っているか分からない。*ハゲをどうにかしてほしい。*女子のお尻をじろじろ見ないでほしい。*女子の背中を触るのは、やめてほしい。*口臭がくさい。たくさんありますね、まず、*早口で何を言っているか分からない。ですが、これは問題ですね。どのように改善されますか？」

「この点は十分に反省しております。つい早口になってしまう悪い癖があります。この投書を肝に銘じて、早口になりかけたならば、一呼吸おいてゆっくり話すように心がけます。誠に申し訳ありません」東国原先生は昨日石原先生に諭されたことを思い出し、できる限り下手に出た。教頭はしばらく時間を置いて、東国原先生を睨みつけながら強い口調で話しはじめた。

「*女子のお尻をジロジロ見ないでほしい。*女子の背中を触るのは、やめてほしい。いったい、これは何ですか！セクハラじゃないですか。このようなことが父母にしたら大変なことになります。これは事実ですか？」真っ赤になった教頭は怒鳴るように質問した。真っ青になった東国原先生は口を震わせ弁解した。「それは、生徒の勘違いです。お尻をジロジロ見るような破廉恥なことは決してやっておりません。女子生徒の背中を触るなんて、これはまったくの誤解です。授業のときに手が肩に触れたことはありますが、軽く肩をポンと叩いたに過ぎません。信じてください」

東国原先生は今にも泣きそうな表情で教頭を見つめた。教頭はこの投書で今まで反抗的だった東国原先生の闘志をくじく事ができたと大満足だった。「しかし、生徒にそのように見られているということは、事実ですから、今後の授業態度を十分改めていただきたいと思います。女子生徒に対するいやらしい目つきは止めてください。いいですか」教頭は東国原先生を最低の教師のように言い放った。

教頭は再度投書を見つめ右手の人差し指で机を二度叩き視線を東国原先生へ向けた。「これは先生のご意向に任せますが、*ハゲをどうにかしてほしい。ですが、先生は28歳でいらっしゃいますね。お気の毒に若ハゲでいらっしゃるんですね。出来れば思い切って、植毛されてはいかがでしょうか。きっと、生徒の人気は上昇すると思いますが」教頭の執拗な攻撃は続いた。

ハゲは東国原先生が最も気にしていることであった。「ハイ、確かに、私も植毛しようと思っていたところです。ですが、植毛一本につき270円かかりまして、髪をふさふさにしようと思えば約200万円かかります。今、貯金しているところです」東国原先生は背筋を伸ばし、これ以上攻撃されないように前向きな返事をした。教頭はニコツとすると、「は～、それは素晴らしいですね。それじゃ～、キャバクラ通いはおやめになったほうがよろしいですね」教頭はとどめのパンチを食らわした。

東国原先生は一瞬固まると、「ハ、イヤ、それは、今は行っておりません。早速、植毛します。ローンが利きますので」ハゲ頭から冷や汗が流れ落ちた。もはや、下を向いて謝る以外に無かったが、東国原先生は日教組の完全な敗北を感じ取った。教頭は追放する日教組のメンバーをさらし者にし、赴任の目的であった日教組の解体に着手できたことに少なからず満足した。教頭は秋元校長の喜ぶ顔が眼に浮かんだ。教頭は心の底で満足感を味わうと、教頭にとって最も頭を悩ませているアイドル活動禁止の議題へと移った。

「目安箱の投書はまだありますが、特に問題になるほどの投書は以上のものでした。第二の議題、糸中アイドルグループ I T C 4 8 活動禁止についての議論に入る前に 1 0 分間の休憩を取ります」教頭は校長と打ち合わせをするために校長室へと向かった。I T C 活動禁止は生徒の反対デモを招くのではないかと秋元校長は不安を教頭に伝えていた。そこで、教頭は再度秋元校長の同意を確かめることにした。校長の同意を得た教頭は夜叉のような顔つきで職員室に戻ってきた。

教頭は席に着くと、ひとつ咳をして低くて力強い声で話しはじめた。「I T C 4 8 の活動禁止を 6 月から実施いたしました、いまだ活動しているという投書がなされていました。I T C 4 8 を指導されている小嶋先生、これはどういうことですか？解散の指示はなされたと思いますが、指示に従わない生徒がいるのですか？」教頭はかなりヒステリックな声で小嶋先生を糾弾した。

鳩が豆鉄砲を食ったような音楽教師、小嶋先生は、突然立ち上がり教頭に向かって頭を下げた。「申し訳ありません。リーダーの大島に解散を指示しましたが、大島、横山、八神、の3名は納得がいかないと言って活動をやめません。そのことを教頭にご報告しようと思っていました。私の指導不足で誠に申し訳ありません」小嶋先生は何度も頭を下げた。ハンカチで目元を押さえ涙を拭いていた。

教頭はI T C 4 8のメンバー1 8名の氏名と成績を把握していた。「メンバーは1 8名。1年生、6名。2年生、4名、3年生、8名。1 5名は指示に従い、3名は従わなかったわけですね。この3名は3年生ですね。ちなみに、小嶋先生はメンバー1 8名の5月に実施された実力テストの偏差値をご存知ですか？偏差値5 0以上は1年の渡辺、3年の横山の二人だけです。お分かりのようにアイドル活動は学力低下の原因となっているわけです。

今、リーダーの活動を止めさせないと、人目のつかないところで活動を続け、I T C 4 8を再結成することは眼に見えています。もう一度、大島に活動をやめるように指示してください。もし、活動をやめないようであれば停学処分を考えなければなりません。いいでしょうか、小嶋先生」教頭の目は血走っていた。小嶋先生の顔は真っ青になっていた。

小嶋先生はしばらく黙っていたが、勇気を出して話しはじめた。「確かに、メンバー全員、成績はよくありません。アイドル活動が学力低下の原因かもしれません。だからといって、解散しなければならないのでしょうか？みんな、楽しく、歌って、踊っている姿はとても輝いています。これからの学習は責任を持って指導いたしますので、活動を続けることを認めていただけませんか。お願いいたします」小嶋先生は頭を深々と下げた。

教頭は唇を左上に引き上げると説得するように話しはじめた。「小嶋先生はまだお分かりではありませんね。アイドル活動は女子生徒だけの問題ではないのです。男子生徒にとっても学力低下の原因となっているのです。例年、文化祭でI T C 4 8の公演をやっていますね。他の中学校の男子生徒もたくさんやってくると伺いました。人気があるのは大いに結構ですが、うわさでは、男子生徒の目的は、なんと、パンチラ覗きと伺っています。

I T C 4 8を見に来る男子生徒のほとんどはパンチラが目当てということです。したがって、アイドル活動は、義務教育である中学校としては認めることはできないのです。糸島中学の男子生徒の偏差値は女子生徒のそれより4も低いのです。これは授業中も頭の中がパンチラになっているからに他ならないのです。天神中学においてもアイドル活動を禁止してからは、男子生徒の授業態度が改善され、偏差値も向上いたしました。

小嶋先生、お分かりになりましたか。アイドル活動は一部の生徒にかかわる問題ではないのです。学校全体の風紀を乱しているのです。ここ数年、糸島中学の偏差値は低下しています。この原因はアイドル活動にあると断言できるのです。ですから、即刻、3名に活動をやめるように指導してください」教頭の口調はまさに検事であった。小嶋先生は被告人のようになだれていた。

小嶋先生の正面に座っていた東国原先生は両手に拳骨を作り突然立ち上がった。「確かに、教頭先生のおっしゃることはごもっともです。そこで、男の気持ちということで、少し意見を述べさせていただきます。今おっしゃられた、パンチラは悪ということですが、パンチラは本当に学力低下の原因でしょうか？男の僕としては関係ないように思えます。パンチラは男のロマンだと思います」言い終わるとすぐに腰を下ろした。

東国原先生は小嶋先生に片想いをしていた。ここで小嶋先生に助け舟を出せば、一気に小嶋先生の気持ちを引きつけることができると思い発言した。小嶋先生はうつむいていた顔を上げ、ほんの少し笑顔を見せた。教頭は左手の中指で金縁の眼鏡の端をほんの少し持ち上げると、眼を吊り上げ、机を右手の拳骨で勢いよく「ドン」と叩いた。一瞬、全職員は背筋を伸ばした。

「パンチラは男のロマンですか。聞くところでは、他校の男子生徒とパンチラの写メのやり取りをしたり、YOU TUBEに掲載したり、こんなことが男のロマンですか！このことは教育委員会でも問題になっているのですよ。ご存知でしたか？」教頭の顔は真っ赤になっていた。小嶋先生はまたもやうつむいてしまった。「それは、寝耳に水です。初めて聞きました。指導不足で申し訳ありません」東国原先生もうつむいてしまった。教頭は勝利の笑みを浮かべると会議を終えた。

パンチラ闘争

職員会議が終わると、小嶋先生は大島、横山、八神たちが首を長くして待っている音楽教室へと駆けて行った。音楽教室では大島がピアノを弾きながら、「真夏のSounds good!」を歌い、横山と八神は踊りながら歌っていた。小嶋先生が部屋に飛び込むと三人の声は止まった。三人は小嶋先生に駆け寄り、先生の手をとると、急いでピアノの席に着かせた。大島が眼を丸くして尋ねた。

「先生、どうでしたか？」大島は小嶋先生の発言に期待していた。小嶋先生は眉を下げ、肩を落として「残念だけど、完全に解散するように命令されたわ。先生、勇気を出して、活動をお願いしたんだけどダメだったわ。みんなの気持ちもしっかり伝えたのよ。でも、ダメだったの。ごめんなさい」小嶋先生は三人の目を順次見つめたが、次第に、横山と八神はうつむいてしまった。大島は右手を握り締め、しばらく鍵盤を見つめていた。

「先生、なぜ、教頭はアイドル活動をそんなに嫌っているの。みんな成績はよくないけど、受験に向け一生懸命頑張ると決意したのよ。勉強頑張るから、三人で教頭をお願いに行くわ、いいでしょ」大島は涙しながら小嶋先生に訴えた。小嶋先生は会議での話を詳しくすることにした。「まって、活動禁止の理由は他にもあるのよ。それはパンチラなの。I T C 4 8を男子生徒が応援するのはパンチラが目的で、このパンチラが学力低下の原因だというのよ。だから、どうすることもできなかったの」

「え！パンチラ、こんなのいまだき普通じゃない。教頭は横暴よ、パンチラのどこが悪いのよ」大島は大声を張り上げていた。「先生も、同感よ。パンチラが学力低下の原因なんてありえないと思うの。東国原先生も関係ないと言ってくれたの。嬉しかったわ。でも、現実には、男子生徒の偏差値は低いし、パンチラが教育委員会で問題になっているとまで言われると、先生、反論できなかったのよ。だから、本当の理由は男子生徒にあるの、悔しいけれど」小嶋先生は大島の悔しがっている顔をじっと見つめた。

大島はしばらく黙っていた。突然、眼を輝かせると明るい声で先生に言った。「分かりました。いま、グループは完全に解散します。先生、このことを教頭に伝えてください。横山、八神いいね、解散よ！」大島は笑顔を見せた。小嶋先生は笑顔を見せたが、「いいのね、本当に納得して、解散してくれるのね」小嶋先生は三人の気持ちを確認めた。「先生、心配しないで、もし、三人が勝手に活動を続ければ、先生はきっと追放されちゃうよ。教頭の思う壺じゃない。名案がひらめいたの！」大島は両脇に立っている横山と八神の肩をポンと叩いた。

大島は二人に作戦の話をすることにした。大島の部屋に集まった三人は作戦会議に入った。「横山、八神、よく聞いてよ。女神が私たちが救うために、ありがたい啓示を下さったの。それはね、男子生徒のパンチラ禁止反対デモ！デモをやらせるのよ、男子生徒に！男子生徒の要求だったら、グループと小嶋先生は関係ないじゃない。小嶋先生は安泰ってわけ！名案でしょ～」大島はドヤ顔で二人を見つめた。

二人は顔を見合わせ頷いたが、横山が怪訝そうに話した。「デモなんて、男子生徒がやるかな～、無理じゃない」八神も「やらないと思う」とぼそりと言った。「二人とも、何、弱気なこと言ってるのよ。話を聞いて、デモのリーダー三人は決まっているの。野球部の菊池、サッカー部の佐藤、バスケット部の松島、この三人をリーダー格にして、デモ隊を結成させるの。三人にデモに参加する生徒を集めさせるってわけ」大島は二人のキョトンとした顔を見つめていた。

「え！三人がデモのリーダーになるって言ったの？」八神は信じられない顔をして叫んだ。大島は笑顔を作ると「それがね～、今からお願いするのよ。二人にも協力してもらわないとね」大島は両手を合わせた。「お願いしても、無理だと思うけど」横山は顔をゆがめた。「きっと、うまくいって！八神は松島に、横山は佐藤にお願いしてほしいの。菊池は私ね。来週の日曜日、八神の焼肉飯店で三人を招待して焼肉パーティーをやるのよ。話は私がつけるから、協力して」大島はまた、両手を合わせた。

日曜日、大島たちは三人の席を準備してじっと待っていた。11時55分、三人はそろって店に飛び込んできた。三人は笑顔を見せ、手を振ると、大島たちの席に向かった。「来てくれてありがとう。こっちに座って、今日はおごりだから、死ぬほど食べて、奥から松島君、佐藤君、菊池君ね」それぞれ、八神、横山、大島の正面に座った。「私たちが焼くから、どんどん食べて、ローズ、カルビ、タン、バラ、ピーマン、たまねぎ、カボチャ、どれから焼こうかな～、まずは、ローズかな」大島はとびっきりの演技をすると、大島、横山、八神は正面の彼氏に肉を焼き始めた。

三人はしばらく無言で肉を口に放り込んだ。食べたことの無いような高級な肉に眼を丸くして、「うまい、うまい」と口をそろえて満足そうな笑みを浮かべていた。「うまいだろ～、これは伊万里牛だぞ」大島は三人のアホ面をしばらく眺めていた。大島はタイミングを計って、話を切り出した。「みんな、ちょっと聞いてほしいことがあるんだ」菊池が口を止めて大島を見つめた。

大島は話を続けた。「今日集まってもらったのは、まあ～、なんと言うか、デモをやってほしいだな。三人がリーダー格になって、参加者を集めてほしいんだ。やってくれるかな～」大島はあいまいな言い方をしてしまった。「デモか、脱原発のデモだろ！まあ、焼肉食わせてもらったことだし、やってもいいよ。どこでやるんだ」菊池はやる気を見せた。大島は気まずい顔をして、「いやね～、脱原発じゃなくて、パンチラ禁止反対のデモをやってほしいんだな、どうだろう、みんな」

三人は「ハハハ・・・」と笑うと松島が言った。「なんですか？パンチラ禁止反対デモって？聞いたことないよな」菊池も怪訝な顔をすると尋ねた。「もっと分かりやすく話してくんないかな～、さっぱりわかんないよ」三人はコーラを飲み始めた。大島は正座するとかしこまった顔で話しはじめた。「実はITC48の解散が決定したんだ。これは教頭の命令だ。解散の理由は男子生徒がパンチラを見て、頭がパンチラになり、学力が低下した、ということだ。まったく、ばかげた話だけど、教頭が言うからしょうがない。

そこで、男子生徒にパンチラは悪でなく、健全なものであると、デモをやってほしいわけだ。諸君、デモをやってくれ、頼む、I T C 4 8の再結成のために一肌脱いでくれ。お願い！」大島は両手を合わせた。三人は話がピンと来なかったが、I T C 4 8が解散すれば、パンチラが見られなくなるのは困ると思った。「I T C 4 8が解散、困るよな～、パンチラを楽しみに、学校に行っているようなもんだからな～」菊池がぼやいた。

「そうだろ～、困るだろ～、パンチラ禁止反対のデモをやってくれ！この通り！」大島は両手を合わせ、頭を下げた。「そこまで言われるとな～、やらないことも無いけど、三人でやるのか？」菊池は一応承諾した。「おい、おい、三人じゃ、デモになんないだろ。せめて、100人はいないとな」大島は大きく出た。「ひえ～、100人、むりっす、10人ぐらいということでどう？」菊池は大島の顔を覗いた。

「ダメ、100人以上よ、そのくらいじゃないと、教頭を叩きのめせないじゃないか。頼むから、100人集めてくれよ」大島は決死の覚悟で頼んだ。「100人か、大島の頼みだし、焼肉も食わせてもらったし、やってみるか、だけど、もし、100人以上集めたら、御褒美がほしいな」菊池はニコツとした。大島は顔をしかめて訊ねた。「どんな、御褒美がいいの？」

「そうだな～、キス！がいいな～、な、みんな」菊池は松島と佐藤に笑顔でサインを送った。二人は大きく頷いた。大島は横山と八神を一瞥すると「よし、口以外にキス一回、これで手を打とう、横山、八神もいいよな」大島は同意を求めると、二人もゆっくり頷いた。「そこで、デモの決行日は8月15日、教職員会議の日だ。午後1時半から午後3時までであるから、午後2時からデモ開始と行こう。諸君のデモにITC48の運命がかかっている。よろしく～～」大島は笑顔を作ってウインクした。

菊池、佐藤、松島、三人は参加者を集める段取りを話し合うために、菊池の家に集まった。デモ参加者はサッカーグラウンドに集合し、そこから職員室に向かってデモ行進をすることにした。野球部、サッカー部、バスケット部、各部員に参加を依頼することは即座に決まったが、100人以上集めるには他の部員にも声をかける必要があった。佐藤は卓球部、テニス部、バドミントン部、剣道部、柔道部の部員に声をかけ、松島は化学部、ギター部、吹奏楽部、美術部に声をかけることにした。

野球部キャプテンの菊池は交流試合をしたことのある他校の野球部に声をかけることにした。福岡市内だけでなく、北九州市、久留米市、小郡市、佐賀市、唐津市、鳥栖市、伊万里市、長崎市、佐世保市、熊本市、八代市の中学にも声をかけることにした。「今、糸島中学でパンチラ禁止になってしまえば、お前の学校もパンチラ禁止になってしまう。だから、パンチラ禁止反対デモを一致団結して、一緒にやろうじゃないか！」と菊池は他校の部長に声をかけた。

デモの呼びかけは8月10日から行うことにした。夏休み中とはいえ、早くから行くと教頭の耳に入る恐れがあったからだ。三人は5日間、二度、三度と参加の声かけを繰り返すことにした。他校の参加者がやってくることも想定して、筑前前原駅から糸島中学までの道案内を野球部とサッカー部の一年生にやらせることにした。“パンチラ禁止反対”のプラカードを各部3個ずつ作ることにした。

デモ決行日、8月15日、午後1時、三人はサッカーグラウンドに集まった。そのとき、野球部1年生2人、サッカー部1年生3人がやってきた。この三人は道案内をさせるために呼んでいた。佐藤と松島は不安であった。二人で必死になって参加を頼んだが、デモの話がうわの空に聞いていたからだ。菊池は他校からの参加を期待していなかったが、近くの中学から5人ほど来てくれることを願った。

午後1時半、本校の生徒が15人ほど集まった。まだ時間があるとはいえ、菊池は大島に100人以上集めると約束したてまえ、少し、不安になった。道案内の一年生を配置につかせた。徐々に、野球部、サッカー部、バスケット部、卓球部、剣道部、柔道部の顔ぶれが裏門から入っていた。ざっと、数えて50人は超えているようであった。菊池は少し笑みが出てきた。後、15分ほどで50人以上集まってくれるよう心の中で祈った。

職員室から菊池のところに野田先生がやってきた。「今日は試合でもやるのか？」野田先生は菊池に尋ねた。「はい、サッカーの交流試合があります。彼らは応援です」菊池は機転を利かせて嘘をついた。野田先生は納得した顔で職員室に戻っていった。野球部の道案内が他校の生徒を20人ほど引き連れてきた。さらに、サッカー部の道案内も大勢の他校の生徒を案内して来た。数え切れないほどの生徒がやってきた。すでに、100人は突破した。菊池は嬉しくて涙が出そうであった

本校の生徒も100人近く集まっていた。他校の生徒は200人以上集まっていた。案内役は信じられないほど集まった参加者をサッカーグラウンドに誘導し、プラカードを手に持って立っている9人のリーダーの後ろに整列させた。整列が終わると、三人は集団の前方に立ち、佐藤がプラスチックの黄色のビールケースに上がりデモの挨拶を始めた。

「みんな、今日はパンチラ禁止反対デモに参加してくれてありがとう！今、一致団結して闘おう！パンチラ禁止は憲法第21条“表現の自由”を踏みにじるものであり、男のロマンを蔑視するものだ！断固、パンチラ禁止に反対だ！左手を腰に、右手の拳骨を天空へ突き上げよう！パンチラ禁止ハンタ～イ！」佐藤がスローガンを叫ぶと、一斉にパンチラ禁止反対のシュプレヒコールが続いた。「パンチラ禁止ハンタ～イ！パンチラ禁止ハンタ～イ！」

300人以上の参加者はプラカードの後に続き、職員室に向かってデモ行進を始めた。シュプレヒコールの声は次第に大きくなり、民家にまで響き渡っていた。学校周辺の家々からは大人子供が飛び出してきた。この騒ぎに眼を丸くしていた。そのころ、騒ぎに気づいた職員たちは窓際に集まり、デモ行進に啞然としていた。東国原先生と小嶋先生は二人見つめ合い、笑顔で拍手した。

教頭は職員室を飛びだすと、校長室に飛び込んだ。窓際に立ってデモを見ていた校長に飛びついた教頭は、白目をむき、泡を吹いて床に崩れ落ちた。

パンチラ闘争

<http://p.booklog.jp/book/60285>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/60285>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/60285>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ